



INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPAN ICOMOS NATIONAL COMMITTEE
c/o Japan Cultural Heritage Consultancy
2-5-5-13F, Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo Japan 101-0003
Tel & Fax: +81-3-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org

報道関係者各位

受賞者関係機関各位

2018年10月19日

日本イコモス国内委員会

「日本イコモス賞 2018」等の受賞者を決定しました

日本イコモス国内委員会は、建造物、伝統的建造物群、文化的景観、遺跡である記念物及び歴史風土の保存、保全及び活用の振興をはかるため創設した「日本イコモス賞 2018」及び「日本イコモス奨励賞 2018」の受賞者を以下の通り決定しました。

1 「日本イコモス賞 2018」受賞者

松隈 章氏（一般社団法人 聴竹居倶楽部 代表理事） 60 歳

— 木造モダニズムの傑作「聴竹居」に対する長年の保存活動と研究・著作実績 —

加藤友規氏（植彌加藤造園株式会社 代表取締役社長） 52 歳

— 文化遺産としての日本庭園の保全研究とその活用についての現代的方策と実践 —

2 「日本イコモス奨励賞 2018」受賞者

恵谷浩子氏（奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室 研究員） 35 歳

— 文化的景観の調査研究・普及・保全に関する取組み —

日本イコモス賞：文化遺産の保存活用理念、保存活用活動、保存活用プロジェクトの前進に貢献し優れた業績をあげた者に授与します。

日本イコモス奨励賞：若手研究者の育成と研究の奨励を目的として、文化遺産の保存活用理念、保存活用活動、保存活用プロジェクトの前進に優れた業績をあげたおおむね 45 歳未満の者に授与します。

今年度の授賞にあたっての基本的な考え方

1 日本イコモス賞を授与する松隈章氏、加藤友規氏の業績はいずれも、日本近代の文化遺産の保存・活用、環境との共生、所有者・管理者・市民等と専門家とのコラボレーション、保存・保全の技術の発展等に深く寄与し、さらにその情報発信は現在における最先端、最良のモデルケースと言っても過言ではない。

我が国の文化遺産の保存と活用が文化財保護法の今回の改正により新たな地平を開こうとしている現在、日本イコモス国内委員会は、松隈、加藤両氏の優れた業績を同時・一体的に評価することが適切であると判断し、両人に「日本イコモス賞 2018」を授与するものである。

2 日本イコモス奨励賞を授与する恵谷浩子氏の文化的景観に関する一連の業績は、奈良文化財研究所景観研究室が10年余にわたって展開してきた文化的景観の保全の諸活動の牽引役としての成果である。文化的景観は文化財保護法上に制度化されて以後もしばらくの間は必ずしも順調な発展を見なかったが、その後、奈良文化財研究所景観研究室による広範かつ深い洞察に基づいて日本各地の文化的景観を発見・再発見し、新たな価値付けを与え、文化財としての文化的景観の指定・選定も急速に増加するという顕著な成果を挙げてきた。

恵谷氏はその牽引役として、旺盛な研究活動のみならず、様々なフィールドワーク、ワークショップ等の開催、多くの美しくかつわかりやすい書籍・パンフレットの編集等を10年余りにわたって先導してきた。

日本イコモス国内委員会は、恵谷氏のこれまでの諸活動を高く評価するとともに、文化的景観の保全の発展に今後さらに貢献されることを確信して、同氏に「日本イコモス奨励賞 2018」を授与するものである。

「日本イコモス賞 2018」等授賞式の開催

「日本イコモス賞 2018」及び「日本イコモス奨励賞 2018」の授賞式を以下の通り開催する。授賞式では、受賞者への賞状等の授与を行うと共に、受賞者よりスピーチを予定している。

「日本イコモス賞 2018」等授賞式

日時：2018年12月15日（土）15:15～15:45

場所：独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 セミナー室（地階）

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43

ICOMOS について

ICOMOS は、1965年に設立された国際 NGO で、加盟各国の文化遺産保存分野の第一線の専門家や専門団体によって構成されています。ユネスコをはじめとする国際機関と密接な関係を保ちながら、文化遺産保存の理論、方法論、科学技術の研究・応用を推進すると共に、ユネスコの世界遺産条約に関しては、諮問機関として、登録の審査、モニタリングの活動等を行っています。現在、153を超える国々に計約 10,100 人の会員を擁し、世界全体の文化遺産の保護措置の向上のための重要な役割を果たしています。2017年の総会で九州大学の河野俊行教授が会長に選任され、ICOMOS 全体の先頭に立って活躍しています。

日本イコモス国内委員会について

日本イコモス国内委員会は、日本国内の ICOMOS 会員が組織する団体で、ICOMOS の日本における拠点として活動しています。2018年8月現在、約 460 名の会員によって構成されています。年 1 回の総会の他、年 4 回の理事会・研究会などを開催するとともに、各種の国際専門委員会（ISC）や国内の小委員会の活動をはじめ、文化遺産保護に関わる政策提言や助言も行っています。

日本イコモス国内委員会の基礎は、関野克博士（東京大学名誉教授、元東京国立文化財研究所長）によってつくられました。ICOMOS の第 3 回総会（1972 年、ブタペスト）で日本国内委員会が承認され、関野博士が委員長に指名されました。その後、日本イコモス国内委員会の規約は 1979 年の ICOMOS 総会で採択され、ICOMOS 執行委員会の承認を経て正式に発足しました。

記

日本イコモス賞 2018 受賞者の略歴・受賞業績・受賞理由について

松隈 章 (まつくま あきら) 氏 60 歳

所属・職 竹中工務店設計本部設計企画部、一般社団法人聴竹居倶楽部代表理事

【略歴】

1957年兵庫県生まれ。1980年北海道大学建築工学科卒業後（株）竹中工務店入社、現在に到る。

【受賞業績】

木造モダニズムの傑作「聴竹居」に対する長年の保存活動と研究著作実績

【受賞理由】

松隈章氏は竹中工務店という大企業に属しながら、長年個人としても、特に歴史的建築物の保存・再生・活用の分野において積極的な研究及び社会的活動を展開してきた。その活動内容は企業の枠を超えた、地域・社会・建築設計者・研究者を広範に巻き込んだものであるが、特に「聴竹居」においては、わが国のモダニズム建築の研究・保存再生・文化財活用の分野で特筆すべき実績を残した。

1996年当時、一般の人々のみならず、建築史家や建築家からも忘れられていた藤井厚二設計の「聴竹居」を再発見し、竹中工務店設計部の有志とともに自主的に実測調査し、その結果を「聴竹居実測図集」（彰国社）に纏め編集出版した。その後も調査研究を継続し、聴竹居の全貌を多くの写真（撮影：古川泰造）と共に紹介する「聴竹居 藤井厚二の木造モダニズム建築」（平凡社コロナブックス）を上梓し、専門家以外の一般の人々への発信を続けてきた。

「聴竹居」の所有者で藤井厚二のご遺族（次女の小西章子氏、孫の小西伸一氏）にも、この住宅の価値を訴え続け保存への確実な道を開いた。その結果、2000年には DOCOMOMO Japan による最初のモダニズム建築展「ドコモモ 20 選」の一つに選定され、2017年には国の重要文化財に指定された。

「聴竹居」が空き家となった 1999 年には、定期借家契約により建物を借家として活用とするアイデアを実現。2008 年春からは自らが借用し任意団体「聴竹居倶楽部」を結成し、代表として地元



大山崎町の町民を巻き込んだ実践的保存活動を推進した。さらにその後「聴竹居」は松隈氏の所属する竹中工務店の所有となり、藤井家、大山崎町、竹中工務店の3者による「一般社団法人 聴竹居倶楽部」を新設して代表理事に就任した。

こうした松隈章氏の地域、企業を巻き込んでの保存活用の長年の努力は、我が国における近代建築の保存活用分野で、その実践者として特筆すべき成果を挙げている。

以上の業績に対し、日本イコモス国内委員会は松隈章氏に「日本イコモス賞 2018」を授与する。

【主要業績】

・ 著作等

「聴竹居 藤井厚二の木造モダニズム建築」 [写真 古川泰造] 平凡社 2015年3月

「聴竹居 発見と再生の22年」 ぴあ株式会社 2018年3月

(共著)

「環境と共生する住宅 聴竹居実測図集 増補版」竹中工務店設計部編 彰国社 2018年4月

「16人の建築家-竹中工務店設計部の源流」石田潤一郎+歴史調査WG 井上書院 2010年12月

・ 寄稿・論文等

「聴竹居」実測の意味するもの 「新建築・住宅特集」2001年5月号

「聴竹居」が現代に問いかけるもの 「武田五一・藤井厚二・田邊淳吉展」図録 2004年

生き続ける建築 時代の先を駆け抜けた住宅作家・藤井厚二 「INAX REPORT 173」2008年

80年前の日本の住宅の理想形 建築保全センター「Re」2009年10月号

藤井厚二「日本の住宅」という設計思想 「Kizuki」2010年1月号

響きあう花と“聴竹居” 「チルチンびと」68号 2011年

「聴竹居」に学ぶ日本人の暮らし 大阪ガス広報誌「衣食住遊」2015年11月号

藤井厚二「聴竹居」の保存と活用 「建築と社会」2016年7月号

聴竹居 木造モダニズム建築 「東京人」2017年5月号

「聴竹居」藤井厚二の木造モダニズム建築 「月刊文化財」2017年8月号

・ 「聴竹居」再発見、調査研究、広報、執筆、講演活動など

1995年から2018年に至る23年間において、数多くの活動を継続。その結果として2016年には竹中工務店が「聴竹居」の土地・建物を取得。2017年には国の重要文化財に指定される。現在、松隈氏が代表理事を務める「一般社団法人 聴竹居倶楽部」では、継続的に建物の管理と見学者対応、広報活動などを行っている。

加藤 友規 (かとう ともき) 氏 52歳

所属・職 植彌加藤造園株式会社代表取締役社長、京都造形芸術大学教授

【略歴】

1966年京都市生まれ、1990年千葉大学園芸学部園芸経済学科卒、2009年京都造形芸術大学大学院芸術研究科修士課程修了、2012年同博士課程修了 博士（学術）

【受賞業績】

文化遺産としての日本庭園の保全・活用の現代的方策の研究とその実践

【受賞理由】

庭師を自称する加藤友規氏は、京都に江戸時代から続く造園業の8代目を2005年に継ぎ、伝統的な社寺庭園から、現代の公園や商業施設・宿泊施設・住宅庭園までの広い分野で現場活動を積み重ねている。加えて2007年から研究活動を続け、特に南禅寺界隈の別荘庭園群を対象とする成果は、現場経験と調査無くしては生まれなかったものとして注目に値する。国指定名勝無鄰菴では、山形有朋の構想した植栽景観を明らかにし、その本質的価値を保存するために「育成管理（フォスタリング）」という概念のもと、庭師の技術力を存分に発揮している。

庭園の鑑賞価値を育成面から伝える「庭師による特別ガイド」や、貸し切り制度による特別な空間体験、五感による鑑賞や夜間の観賞を可能にする茶会・各種講座・ライトアップなど、創意あふれる活用イベントは年間で80回以上（2017年度）にも及び、庭園における日本文化の体験・学習を可能にしている。

庭園文化の理解を広めるためのテレビなどメディアでの情報発信や「小学生への環境学習事業」への参画、さらには自社における専門家集団の形成や海外からの研修生受け入れを通じての人材育成にも積極的である。

加藤氏による日本庭園の本質的価値に関する研究活動、それらを踏まえた育成管理、創意ある事業の実践、庭園文化の普及活動、庭園を支える人材の育成、これらすべての実績の中には文化財庭園の保存と活用において有効なアイデアと実践例が示されている。これら加藤氏の業績には、庭園文化遺産の保存活用理念・活動・プロジェクトの前進に多大なる貢献が認められる。

以上の業績に対し、日本イコモス国内委員会は加藤友規氏に「日本イコモス賞 2018」を授与する。

【主要業績】

「可有荘庭園における歴史的変遷と復元的考察」2009 修士論文

「渉成園の空間的特質に関する研究」2012 博士論文 ※2012年度日本造園学会賞（研究論文部門）



「山縣有朋記念館所蔵の古写真に見る往時の無鄰菴庭園に関する研究」共著 2017 日本造園学会論文集
「名勝無鄰菴庭園の年間管理―山縣有朋の感性を読み取った庭園管理のあり方―」共著 2015 日本造園学会技術報告集

「名勝無鄰菴庭園における本質的価値としての野花を生かした芝生管理のあり方」共著 2017 日本造園学会技術報告集

主な所属学会：(公社)日本造園学会(理事)、日本庭園学会(理事)、日本遺跡学会、文化財保存修復学会、日本産業技術史学会など

日本イコモス奨励賞2018 受賞者の略歴・受賞業績・受賞理由について

惠谷 浩子(えだに ひろこ)氏 35歳

所属・職 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室研究員

【略歴】

1983年広島県生まれ、2005年東京農業大学地域環境科学部造園学科卒業、2007年同大学大学院農学研究科造園学専攻博士前期課程修了、2008年同博士後期課程中退

2007年独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室特別研究員。2009年同研究所文化遺産部景観研究室研究員、現在に到る

【受賞業績】

文化的景観の調査研究・普及・保全に関する取り組み

【受賞理由】

惠谷氏は、2007年以来奈良文化財研究所景観研究室に所属し、今日まで主として文化的景観の調査研究・普及・保全について、地域計画を含む広い視野から実践的に取組を続けてきた。なかでも、同研究室が主催する「文化的景観研究集会」(2008年度～)及び「文化的景観学検討会」(2012年度～)では当初から一貫して事務局を務め、多様な分野の研究者、行政担当者、地域住民などの参加を促し、学際研究・情報共有・相互交流等の場の構築や報告書の編集発行等を先導してきた。文化的景観学検討会として2015年に刊行した「文化的景観スタディーズ01 地域のみかた―文化的景観学のすすめ―」では、<文化的景観>は“地域の見方・とらえ方”であり、“地域のコミュニケーション・ツール”であるとの共通認識を示している。以後この認識に基づいて、四万十川流域や宇治、京都岡崎、岐阜・長良川流域などの文化的景観の調査研究、地元



を巻き込んだフィールドワークやワークショップの実施、これらの活動の調査報告書や保存計画の策定、また一般に分かり易く説明する書籍やパンフレットの編集、監修等多面的に取り組んできた。これらの活動により文化財としての「文化的景観」の指定や重要文化的景観の選定も著しく進展している。

また、恵谷氏はユネスコ発行の‘World Heritage Cultural Landscape’の日本語版制作と web への登載(2015)、米仏の文化的景観現地調査、中国での専門家会合への出席など、国際的な場面でも活躍してきた。さらに、文化遺産の包括的な保護をめざす遺跡学にも活動の場を拡げ、戦後黎明期を築いた諸先学のインタビューを「遺跡学の宇宙」(2014)を事務局として纏め上梓している。

このように、恵谷氏はこれまでに文化財保護制度としての「文化的景観」、地域の新しい見方としての「文化的景観」の発展に多大の貢献をしてきたが、今後他の分野も含めて文化財の保存と活用にさらに新しい地平を開く可能性を秘めているものと期待される。

以上の業績に対し、日本イコモス国内委員会は恵谷浩子氏に「日本イコモス奨励賞 2018」を授与する。

【主要業績】

・著作等

恵谷浩子・本間智希・福田容子 編

「都市の営みの地層—宇治・金沢」文化的景観スタディーズ 04 奈良文化財研究所 2016

恵谷浩子・本間智希・福田容子 編

「川と暮らしの距離感—四万十・岐阜」文化的景観スタディーズ 03 奈良文化財研究所 2014

恵谷浩子・本間智希 編

「営みの基盤—生態学からの文化的景観再考 [文化的景観研究集会 (第7回) 報告書]」文化的景観スタディーズ 02 奈良文化財研究所 2016

文化的景観学検討会・編 恵谷浩子・小浦久子

「地域のみかた—文化的景観学のすすめ—」文化的景観スタディーズ 01 奈良文化財研究所 2016

恵谷浩子・前川歩 編「遺跡学の宇宙 戦後黎明期を築いた13人の記録」日本遺跡学会 2014

・論文

文化的景観という取組の有効性と課題 農村計画学会誌 33(2) 157-158, 2016年

アメリカ合衆国における文化的景観保全の輪郭 奈良文化財研究所紀要 2012年 22-23

住民意識の反映としての文化的景観 ランドスケープ研究 73(1) 18-21, 2009年

・講演

営みの関わり合いを伝える—岐阜・暮らしの伏流水 全国文化的景観地区連絡協議会岐阜大 2017年

日本の文化的景観の保全に関する現状と施策 日中大学交流文化遺産国際会議 2015年

・普及等にかかる小冊子制作

奈文研景観研究室（担当：恵谷浩子）編「岡崎公園―洛東にできた都市の広場―京都岡崎の文化的景観Ⅰ―」 京都市文化市民局発行 2018年

奈文研景観研究室（担当：恵谷浩子）編「白川と疏水―都市をめぐる水の冒険―京都岡崎の文化的景観Ⅱ―」 京都市文化市民局発行 2018年

奈文研景観研究室(担当：恵谷浩子)・神原充大 編「茶畑のある風景なぜなに―南山城村、山の風土と暮らしをめぐる―」南山城村役場発行 2018年

《本件に関するお問合せ先》

日本イコモス国内委員会事務局 担当：矢野/苅谷
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩波書店一ツ橋ビル 13F 文化財保存計画協会気付
電話/FAX: 03-3261-5303
E-mail: jpicomos@japan-icomos.org
Web: <http://www.japan-icomos.org>